

情報化社会の課題

森 光 義 昭

Issues Relating to Information Technology and Society

Yoshiaki Morimitsu

要 旨

現代社会を表現する言葉の一つとして情報社会と称しているが、目まぐるしく変化する社会に対応するためには学校教育の場においても、従来から行われてきた教育に対しての変革が求められている。その中でもIT産業に伴う情報の発展はコンピューターやその周辺機器の開発が進み、人々はそれらの操作の仕方を学習することに追われている状態である。次から次に商品の開発が進められていくと、青少年たちは情報についての正しい知識や理解を得ることに追いついていくことができずに、ただ目新しい商品へと関心が寄せられることになっている。

本研究ではその方法として、大学1年生男女（教職課程科目履修者）に対して質問紙によるアンケート調査を行う。現代の若者の携帯電話を中心に据えてそれらの関連性の実態を把握することによって、現代の青少年の情報に関する課題を分析し、情報化社会をどの様に捉え、展望や課題性をどの様な認識をもってスタンスを取っているか、また、携帯電話に対する理解や認識、携帯電話が日常の生活にどの様な影響を与えていたり、さらに、今後の教育の在り方等について研究する。

調査結果から見えてくるものは、携帯電話はほとんどが高校生までに保護者から買ってもらつて持っている。携帯電話を持った動機としては友人が持っているのでという何となくという状況である。1ヶ月間の携帯電話の使用料は5,000円以上～10,000円未満がもっとも多い。また、使用している回数も3回から5回辺りに集中しており、中には11回以上というのもあり、時間的にも1時間程度使っているという状況である。したがって、経費もかなりの高額になっている。最近の若者の活字文化離れが指摘されているが、手紙を書くという生活経験も少なく、手紙を書く形式や手紙に用いられる用語等の理解も十分ではない。また、新聞、小説（本）、雑誌などを読む習慣も身に付いていない。

情報社会における情報機器（マス・メディア）に対する認識としては、その機器に対する生産性や目的の正の効果と負の効果の両側面を十分に捉えることができないでいる。特に、情報機器（携帯Eメール）の利点として、人と直接会わないので連絡が取れるから便利であると認識していることに対しては多くの課題があるようと思われる。したがって、情報や情報機器についての学習の在り方として、パソコンの使い方（操作の仕方）の学習や実際に学習課題の解決のためのソフトを使った学習や教科の学習は行っているが、これからは、「情報機器が産業社会や日常生活にどの様な豊かさや危機をもたらしているか」という観点での「情報」に関する

る学習のカリキュラム編成が重要な課題となってくる。機器の取り扱い方の習得は言うまでもないが、新しい学力観に立った情報教育の在り方が幅広く求められることになる。

キーワード

情報社会 メディア 携帯電話 Eメール パソコン コミュニケーション 情報教育

1. はじめに

今、人々は現代社会を国際社会、福祉社会、情報社会、環境・資源保護社会などと称している。その中でも、IT産業において情報機器の一つであるコンピューターやその周辺機器の開発が進み、人々はそれらの操作の仕方を訓練することに追われている状態である。情報機器の開発は日進月歩ならず分進時歩という新しい言葉が生まれる程の勢いで進んでいる。したがって、新しい機器の使い方を習得した時はすでにさらに新しい機器が世間に出ていているという状態である。例えば携帯電話も当初はPHSから始まったが、その時は当然人との会話のみであった。しかし開発が進み情報を発信するためのサイトがつくられた。当初は天気予報、交通情報などが主体であったが最近では出会い系サイトなどにみられるような青少年に悪影響を与えるようなものまで存在している。一方、経済の観点から見てみると、商品に付加価値をつけるためにカメラやラジオを付けたり、着信のメロディー（着信メロ）に工夫を加えたり、ゲームやメールの操作のしやすさに研究が重ねられ、また、販売面では携帯電話の使用料の割引制度を導入したりしながら加入者獲得に力を注いでいる。したがって、このように次から次に商品の開発が進められていくと、青少年たちは情報についての正しい知識や理解を得ることに追いついていくことができずに、ただ目新しい商品へと関心が寄せられることになっている。

そこで、本研究では現代の青少年の携帯電話を中心に据え、それらの関連性の実態を把握することによって、情報化社会をどの様に捉え、展望や課題性をどの様な認識をもってスタンスを取っているか、さらに、携帯電話に対する理解や認識、携帯電話が日常の生活にどの様な影響を与えていたかということについて研究する。

2. 調査の概要

調査方法 質問紙によるアンケート調査

対象者 大学1年生男女（主として教職課程科目履修者）

対象者数 368人

調査時期 平成16年7月

表中の数字の単位 パーセント（%）

3. 携帯電話等に関する調査の集計と考察

（1）携帯電話を持った時期

携帯電話を何時手にしたかということについては高等学校1年生の時が最も多い。携帯電話

を買った動機や理由は高等学校の入学祝いや高校生になった記念にと保護者からのプレゼントが最も多い。今回の調査対象者については小学生の時に携帯電話を持ったという者はない。中学生ですでに 25.1 % と 1/4 の者が持っており、高校生（全学年の合計）が 71.8 % で最も多く、ほとんどがこの時期に所有していると見てよい。また大学生になって持った者はわずかに 3.1 % に過ぎない。

表1 携帯電話を持った時期 (%)

時 期	割 合
小 学 生	0.0
中 学 生	25.1
高校 1 年	48.2
高校 2 年	11.8
高校 3 年	11.8
大学 1 年	3.1

現在の中学校における情報教育に関する学習はパソコンソフトによる学習支援ソフトを使っての学習が中心になっている。パソコンの使い方が中心となっているので、情報に関わって出て来る諸々の問題を考えるような学習は十分ではない。したがって、例えばサイト、迷惑メール、090 金融など、携帯電話から派生してくる問題を教科の学習場面で取り上げるというようなことはない。そこで、特別活動や道徳、総合的な学習の時間などでこのような内容のカリキュラムを編成して、発展している情報機器に対する認識を深めるような学習をしていかなければならない。

（2）携帯電話を持った動機

携帯電話には様々な機能が付加されている。本来は言葉の伝達手段であるが、最近ではメール、カメラ、ラジオ、テレビ、ナビゲーション、レコーダー、家庭用電気製品のリモコンスイッチなど、モバイルとしての機能を備えたものが中心となっている。（表 2 は複数回答のため、調査対象者数に対する割合で表す。）

表2 携帯電話を持った動機 (%)

動 機	割 合
家族から連絡のために持たされた	54.3
友人と話がしたいと思った	52.0
友人がメールをしているのを見て	77.8
友人が持っているので	33.8
何となく	12.6
その他	4.7

調査結果によると、メールをするためが 77.8 %でもっとも多いが、携帯電話はメールをするために手に入れたという考えが最も多い。その他の理由としては、「保護者から部活動の関係で持たされた」、「友人との会話や連絡」、「時代に遅れるから」、「姉妹が譲ってくれたから」などとなっている。また、携帯電話による E メールは現代の青年に大いに受け入れられている。表 3 の調査結果でも、携帯電話の用途については E メールをするためが 37.4 %で最も多い。

表 3 携帯電話の使用目的 (%)

使 用 目 的	割 合
人と連絡をとるため	31.3
人との会話を楽しむため	19.8
情報を収集するため	9.9
E メールをするため	37.4
写真をとるため	1.6

携帯電話の用途目的としては E メールをするためが 37.4 %で最も多いが、その理由は、通常の電話として使用する場合、直接相手が電話に出なければ成立しないが、E メールであれば留守電機能的の要素を持っているため、何時でも何処でもできる。そのため気楽に相手に伝言することができるという考えが身に付いている。また、E メールの利点は情報を相手に速く伝えることができる点にあるが、僅かな文字数によって相手に自分の気持ちを伝えることは非常に困難である。若者の間で流行しているのが絵文字と言われているものであるが、これを使うと一通りの意思は伝えることはできる。しかし、誤解を招くことも考えられる。手っ取り早い方法ではあるが、それは文章をつくるということではないためである。人が他の人へ自分の意思や気持ちを伝えるためには直接会って話をしなければ伝わるものではない。通常の会話の場合、その時に伴った顔の表情を見て取ることから始まる。また、そこには人が発した言葉には感情が込められている。語気が柔らかかったり強かったり、テンションが高かったり低かったり、声が大きかったり小さかったり、早口になったり遅くなったり、明るい口調であったり暗い調子になったり、怒鳴ったり叫んだりと人と会って話さなければ文字や絵文字だけでは相手に気持ちを伝えることはできない。それが会って話すという、つまり会話なのである。そこに、現代の若者がコミュニケーション不足であるとか、コミュニケーションを苦手としているなどと言われるようになった要因があるよう思われる。

(3) 1 ヶ月間の携帯電話の使用料

携帯電話の使用料は 5,000 円以上～10,000 円未満が 52.9 %で最も多い。現在の携帯電話の通話料は割り引き制度をとっている場合が多く、通常の会話のみの使用料であれば月定額の基本料金（2,500 円～3,000 円）がほとんどであるので、それでこのことは、E メールの使用料が多額にわたって含まれていることを意味している。なかには 30,000 円程の使用料になっている者もあり、1 日 10 回以上送信し、E メールにかかる代金となっている。それ程今の若者には E メールが流行していると言える。E メールを送信する理由には①人と直接合わなくても

表4 1ヶ月間の携帯電話の使用料 (%)

使 用 料	割 合
3,000円以内（基本料金）	2.9
3,000円以上～5,000円未満	10.3
5,000円以上～10,000円未満	52.9
10,000円以上～15,000円未満	22.1
15,000円以上～20,000円未満	7.4
20,000円以上～25,000円未満	2.9
25,000円以上～30,000円未満	1.5
30,000円以上	0.0

よい、②何時でも何処でも伝達できる、(留守電の働きがある。) ③言い難いことでも伝えやすいなどとなっており、このことからも現代の若者が人との接触を避け、人との触れ合いを面倒に思っている実態が浮かび上がってくる。このことがコミュニケーションをとることを苦手としたり不足となる原因をつくっている。

また、携帯電話に対する認識の実態として、携帯電話の使用にあたって、利便性と不便性について次のように認識している。まず、携帯電話の利便性としては、①急を要する時に便利である、②持ち運び（移動）がしやすい、③直接当人と話ができる、④何時でも連絡が取れる、⑤何処でも連絡が取りやすいなどである。(数字は頻度数の高い順序である。) また、Eメールの利便性としては、①人の顔を見ないで連絡出来る、②人と話さなくて済む、③友達が（メル友）増える、④時間を気にしなくてよい、⑤持ち運び（移動）がしやすい、などである。

(数字は頻度数の高い順序である。) ここで問題であると思われるは、「時間を気になくてよい」、「人の顔を見ないで連絡出来る」、「友達が増える（メル友）」、「人と話さなくてよい」などを利便性として捉えていることである。会話というのは人と人が対面してこそ成立するものである。しかし、現代の若者は人との触れ合いを必ずしも好んでいない。そのことがコミュニケーション不足や人との接し方、挨拶をはじめ会話の交わし方などが身に付いていない原因の一つになっている。一方、携帯電話のEメールの不便性については、①いつも携帯電話が気になる、②Eメールのために時間をとられる、③メールを送ったのに返信がないと気になって距離感を感じる、④いたづら電話がかかってくる、⑤迷惑メールが送られてくる、⑥サイトからの通信がある、⑦経費が掛かり過ぎる、⑧個人情報が漏れる可能性がある、⑨便利過ぎて気配りが足りなくなる、⑩誤信する可能性がある、⑪人に相対する時のマナーが身に付かない、⑫操作の仕方がわからないことがある、⑬メモリーが消えることがあるので困る、⑭電波が届かない時は困る、⑮携帯電話に頼り過ぎるなどである。(数字は頻度数の高い順序である。)

日常生活の中で携帯電話に関して、かなり多くの時間を費やしていることが分かる。むしろ、このことによって時間を潰しているという感じさえする。現在の日常生活が便利過ぎて時間を持て余しているという生活が日常化しているため、どんなことに時間を使うか、何をして過ご

すかという目的意識が明確ではないために何となく、携帯電話を手にして時間を費やしている者が多い。また、携帯電話は⑪番にあげたように、人に相対する時のマナーが身に付かないと指摘している者もいるが、ほとんどは人の存在よりも携帯電話その物が気になるという意識の方が強いことが分かる。日常の家庭生活や社会生活（就業時間帯）において、先方との電話での対応に戸惑うようなことがないように、社会人となる前に学校というミニ社会において適切な対応ができるように学習活動を編成しなければならないだろう。

（4）携帯電話の入手方法

携帯電話を手に入れた時期は割合に低年齢の時期である。したがって、どのようにして入手したか、また、使用に関わる経費はどのようにしているかを見る。中学生や高校生時代に入手した者がほとんどであるために、大半が保護者から買ってもらっている。（90.2%）したがって、携帯電話を持つということについては保護者が同意しているということになる。むしろ保護者の方が連絡を取るために持たせているという傾向も少なくない。それは事件絡みの社会不安からくる危機管理や自己管理の側面が大きく働いているからである。

表5 携帯電話の入手方法 (%)

入 手 方 法	割 合
保護者から買ってもらった	90.2
自分のお小遣いで買った	5.0
アルバイトをして買った	1.6
プレゼントでもらった	1.6
家族の人から譲ってもらった	1.6

携帯電話を会話として使用している回数は1日平均もっと多いのは3回が23.4%で、その他は1回から5回程度に集中している。送信の相手は家族の者がほとんどであり、友人との会話はほとんど行われていない。

表6 1日平均の携帯電話の使用回数 (%)

回数	割合	回数	割合	回数	割合
1回	17.0	2回	17.0	3回	23.4
4回	12.8	5回	10.6	6回	4.3
7回	4.3	8回	2.1	9回	0.0
10回	2.1	11回以上	6.4		

さらに、メールを送るためにどれくらいの時間を使っているかということについては次の表7の様な結果である。1日の生活の時間帯の中においてメールを送るために費やす時間は、個人的なメール送信に必要な技能面に差異はあると思われるが、1時間以上使っている者が38.8%であり、かなりの時間を費やしていることが分かる。最近では、道を歩いている時も、電車に乗った時も、自転車を走らせている時も、携帯電話を見ながらキーに触れている若者の姿を

表7 メール作成に費やす時間 (%)

時 間	割 合	時 間	割 合	時 間	割 合
1分～10分	4.3	11分～20分	5.1	21分～30分	6.6
31分～40分	8.8	41分～50分	11.9	51分～60分	25.5
61分以上	38.8				

見掛けることが多いが、そのことからもよく伺い知ることができる。

携帯電話を、会話をするという目的以外にどのような使われ方をしているかということを見ると次の表8の通りである。

表8 1日平均のメール送信回数 (%)

回 数	割 合	回 数	割 合	回 数	割 合
1回	0.0	2回	0.0	3回	5.0
4回	1.7	5回	1.7	6回	0.0
7回	3.3	8回	5.0	9回	6.7
10回	6.7	11回以上	69.9		

のことから、携帯電話は会話としての使い方よりも、1日平均のメール送信回数は1回以上が69.9%で最も多く、文字を送るというメールに使われている例が多いことが分かる。そこで、もはや、現代社会では特に青少年にとって携帯電話のEメールが手紙の役目に代わった感じがするが、日常生活においてどれだけ手紙を書いているかという観点から見ておきたい。そこで、手紙を書くこと、書式、手紙に使用される、例えば「拝啓」や「謹啓」の用語などについての理解度を調べてみた。

表9 手紙を書く (%)

書 く 状 況	割 合
非常によく書く	1.5
よく書く	3.0
時々書く	8.8
あまり書かない	30.9
ほとんど書かない	55.8

この表9の結果から分かることは手紙はほとんど書かない(55.8%)、あまり書かない(30.9%)と合わせると86.7%であり、現代の若者が携帯電話をかけることによって、文字や文章が携帯のEメールに奪われていることが分かる。特に友人については全く手紙を書くということではなく、携帯メールで済ませるというのが実態である。わずかに年賀状などで手紙を書くことはあるが、日常生活において、手紙を書くということはほとんどないために日常的に習慣化しておらず、手紙を書く能力が身に付いていないことが判明する。また、手紙の書き出し

に用いられる「拝啓」や「謹啓」の言葉がどの様な意味を持ち、どの様な時に使われるかということについて理解している者はわずかに 6.7 % に過ぎず、この言葉が手紙の書き出しに用いられることはほとんど理解されていない。

したがって、職場体験などでお世話になった人々に対して手紙を書くという姿勢が出来上がっていない。これからは総合的な学習の時間などにおいても、このような一連の活動を取り組んだカリキュラムの編成を考慮しなければならないところであろう。

3. 現代の青少年の傾向と特徴

(1) 新聞に対する実態

大学生の就職に関わって、現在、企業が求めている人材は創造性に富んでいる人、主体性のある人、課題解決力のある人などであるが、情報化社会がもたらす青少年への影響は論述してきたように様々な課題を呈している。携帯 E メールの発達に伴って、新聞を読まない、読書をしないなど活字文化離れが言われている。

表 10 新聞や雑誌の読みの実態 (%)

読みの状況	割合
毎日読んでいる	3.1
よく読んでいる	6.2
時々読んでいる	12.5
ほとんど読まない	62.7
読まない	15.5

新聞は情報伝達媒体の主流としてその重責を担っているが、最近では世界のニュースを知るためににはテレビという強力なメディア（媒体）が活躍をしている。新聞は読むという能動的な活動を必要とするが、テレビは見ていればよいという受動的な活動であり、活動としてのエネルギーの使い方が根本的に異なっている。最近ではパソコンによるインターネットを活用すればさらに情報が高速であり、大容量のニュースを取得することができる。しかも、自分が得たい情報を好きな時間帯で検索できる。まさに驚異的なメディアである。また、現代ではホームページやインターネットという手段を使って簡単にネットショッピングができるようになっているが、これはコンピューター時代の新しい商業方法と言えるものである。自宅にいながら買い物に関する情報が得られ、しかも買い物ができるという時代になっている。したがって、情報を得るために屋外に出て活動をしたり、図書館へ出かけて関連の書籍を探し、情報を得るということをする必要もない。したがって、現代の若者にとって携帯電話は新聞以上の存在となっている。そこで、新聞によって情報をどの様な形で得ているかということを見てみたい。

新聞を読んでいる者のなかでも、主にどこを読んでいるかという問い合わせに対してはテレビ番組面（100.0 %）をはじめ、スポーツ面（88.5 %）や家庭・趣味・娯楽面（58.5 %）が中心であり、現代社会の傾向はレジャー志向といわれている通り、レジャー的思考が強く、政治、経済、社会面についての情報を新聞から得ようとは思っていない。そのことの背景にあるものは、現

表11 主として読んでいる新聞記事の内容（複数回答）（%）

新聞記事欄	割 合	新聞記事欄	割 合
政 治 面	6.8	経済面	5.3
社 会 面	12.7	教育面	8.5
郷 土 面	38.1	家庭・趣味・娯楽面	58.7
ス ポーツ面	88.5	テ レビ番組面	100.0

代の若者は高度経済成長期の物の豊富な時代に生まれ育っており、特に経済的な観念の認識が甘いように思われる。したがって、政治、経済、社会に対する関心度が低いように思われる。現代の社会にあって、「何が社会問題となっているのか」、「人々はどんなことに努力をしていかなければならないのか」、「課題解決のためにどのようなことをすればよいのか」などの課題意識を持つことと、今後の展望を見開いていくことの重要性などをほとんど深刻に受け止めていないのが現状である。

（2）若者の活字離れ

表12 活字に触れる機会の頻度（%）

情 報 媒 体	5	4	3	2	1
図書館で本を借りる	9.5	10.2	40.9	19.7	19.7
専門書・小説などを買う	4.7	4.7	3.9	8.0	78.7
雑誌の定期購読をしている	0.0	0.0	0.9	2.3	96.8
趣味・娯楽の雑誌類を買う	22.0	23.6	26.0	14.2	14.2
日記をつける	0.9	2.3	3.9	10.2	82.7
手紙を書く	2.3	3.9	6.3	30.0	57.5

（凡例）5:非常によく当たる 4:少し当たる 3:どちらともいえない 2:あまり当たらない 1:ほとんど当たらない

今、巷には沢山の書籍が店頭に並べてある。雑誌類はコンビニや駅の売店などにもある。また、学校の蔵書数や自治体の図書館の数も依然と比較すると随分と増加し充実している。しかし、それだけ日常生活において目に触れことが多いにも関わらず、手に取るという構えはできていないために現代の青年は読むことも書くこともあまり行っていない。

（3）情報や情報機器についての学習経験

これまで、中学校や高等学校において情報に関する学習の内容的な側面を見てみると、パソコンの使い方（操作の仕方）の学習（100.0 %）や実際に学習課題の解決のためのソフトを使った学習や教科の学習でソフトを使って調べ学習や反復練習（88.8 %）を行ったり、文章の作り方（ワード）の学習（68.7 %）をしてきている。しかし、パソコンの使い方は上達しても、例えば、「情報は産業社会にとってどの様な役割を果たしているか」や「私たちの日常生活にどの様な豊かさや危機をもたらしているか」や「これから社会が情報機器のさらなる開発に伴ってどの様な社会がつくられていくか」などの学習（6.8 %）はほとんどなされていない。

また、教科外諸領域（道徳や特別活動など）においてもほとんど学習がなされていない。したがって、商品開発によって付加された目新しい諸々の機能（例えばメール送信や着メロやカメラなど）に興味や関心が寄せられる。また、一方で経済ルートの面では青少年に有害な出会い系サイトやメールといった青少年が興味を抱くような情報が氾濫し、その結果、事件に巻き込まれたり、高額の使用料を請求されたりするようなケースも出てきている。したがって、まずは情報とは何かということを十分に理解し、情報の価値判断をし、自分にとっての必要な情報を選択できるような能力を学習の場において育成することが重要である。

4. 情報社会に対する認識

私たちはパソコンのインターネットによって情報をいち早く手に入れることができる。パソコンの威力はなんと言っても情報の高速伝達と情報量の拡大にある。パソコンは現代社会において非常に重要なものとなっているが、反面社会問題を引き起こす要因になったり、青少年に悪影響をもたらしたりしている。科学技術の粋を集めて人間が作り出す機器は人間の目的達成のための生産性の正の効果と負の効果の両側面を見据えていかなければならない。

そこで、現代の青少年が情報化社会の中で生活をし、テレビをはじめパソコンを中心に携帯電話やパソコン用ソフト、情報に関する社会性など、マス・メディアに関わって、そのことをどのように認識しているかという観点からも見ておくことが重要である。

そこで、「今、情報化社会と言われていますが、このような社会に対してどんな感想を持っていますか。また、あなたが若者の一人として、提言したいがありましたら何でも結構ですでの自由に書いてください。」という設問によって現代の青年の情報に関する認識について分析を行った。

まず、利点（正の効果）としての認識では、①情報がたやすく手に入る（7.0%）、②便利な社会になったと思っている（6.1%）、③ネットで商品が手に入る所以便利である（4.3%）、④相手に速く伝わる（3.5%）、⑤情報は楽しい（1.7%）である。次に、生活などへの影響（生活様式の変化）として認識しているものは、①消費生活の拡大を懸念する（2.6%）、②自然環境を中心とした生活ではないなどの生活様式が変化している（1.8%）、③ネットによって買い物がし易い（1.5%）である。携帯電話などに対しての問題意識として捉えているものとしては、①出会い系サイトなどの社会問題が出ている（8.0%）、②悪影響を与える情報が出てくる（7.8%）、③犯罪につながる可能性を含んでいる（7.5%）である。一方、携帯電話にはマイナス要因（負の効果）があり、疑問点もあるとしながらあげているものに、①個人情報が流出しやすい（6.1%）、②チャットなど見知らぬ人との交流は好ましくない（5.9%）、③便利である反面、怖い面も持っている（5.6%）、④文字を書く機会は減少した（3.6%）、⑤今の社会は情報に踊らされ過ぎている（2.6%）、⑥安心できる自分の居場所を求めることができるのだろうか（1.7%）、⑦本当のコミュニケーションをとる機会と場が少なくなる（1.3%）、⑧人と人とのつながりが希薄になっていく可能性をもっている（1.0%）などがある。さらに、今後の課題として、①必要な情報を選択する能力を教育しなければならない（4.3%

%)、②情報に関する教育の必要性を感じる(3.5 %)、③情報に関する条例の整備と新たな制定が必要である(3.0 %)、④情報に関する自己管理や危機管理が重要である(2.6 %)、⑤環境問題との関連で情報化社会を進めていくべきである(1.9 %)、⑥マスマディアに依存し過ぎるため人間の機械化が進むのではないか(1.5 %)をあげている。

現代の人々は情報化社会を「便利な社会になった」と思っていたり、「情報をたやすく手に入れることができる」ということや「相手に速く伝えることができる」という実感を持っている反面、負の効果についての認識は薄い。例えば、情報媒体の開発によって人間の感情が機械化されたり、感情の画一化が行われたりしていることに気付いていない。

情報化社会での人間化を推進していくためには今後の課題として、自分にとって重要な「情報を選択する能力」を育成したり、学校における「情報教育の必要性」を感じており、青少年が健全に育つための「情報に関する条例の制定」なども重要であると認識している。今後は、学校教育を中心に家庭と社会が協働し、メディア開発の現状に併せて総合的な情報に関する教育の充実を図っていかなければならないところであろう。併せて豊かな情報社会を築くための産学の一体的な体制基盤を構築することも重要となってくる。

5.まとめ

21世紀の社会の一つとして、情報社会の時代であると言われている。例えば、九州新幹線が開通した日の最初の「つばめ」の座席指定券がインターネットによって予約販売されたが、それが3秒間で全席が満席になったという。また、野球観戦のチケットの予約、コンサートや歌や踊りのライブチケット、映画館のチケット、ホテルや温泉旅館の予約なども同じ方法で行われている。マスマディアの一つであるパソコンや携帯電話の普及は目を見張るものがある。街を歩いていても、電車に乗っても、携帯電話に向き合った若者が溢れている。この10年間における変化の最たるものは、「携帯電話」にあると言ってよいだろう。いろいろな会場でも必ず、「携帯電話の電源を切って頂くか、マナーモードに切り換えて頂きますようお願い致します」というアナウンスを聞くことが多くなった。世間では今の若者を"携帯世代"と称しているが、現代社会を象徴していると言えよう。特に若者にとって携帯電話は生活の中心的存在であり、携帯電話を手から離すことはできない。また、パソコンの普及も目覚ましいものがあり、インターネット・オークションという新しい分野はつい最近まで予想もしなかったことである。家庭にあっては育児に多くの時間を費やすことよりも、ホーム・ページに、「育児に関する悩みや方法」についての書き込みに多くの時間を費やすという現象も起こっている。子どもと向き合う時間よりもパソコンと向き合う時間の方が多くなってきたという現象は、人の精神作用を信じることよりも、機械の何かの力に頼ることの方が優先される時代になっているということなのだろうか。また、テレビやパソコンは若者が本を読まない、文字を書かない、文章や手紙を書かないなどの活字文化離れを引き起こしている。本来、会話は人と人が対面することによって成り立つものであるが、携帯電話のEメールは人ととの精神の交流を図ることなく、意思の伝達が機器によって行われるという点で、コミュニケーションとしての人間関係の希薄

化を招いている。さらに、パソコンの使用はキー操作一つで必要な情報を簡単に検索し、解決することができ、これまでのような活動によって本物を体験したり、出会う機会を少なくしていると言える。産業構造や生産システムの変革や商品流通の形態が多様化するなか、IT関連の商品開発のみが先行し、人々がその商品開発の思想を十分に理解することに追いつくことができず、利潤追及という産業社会の仕組みの中で、青少年たちは踊らされ、時には利便性に援助を受けながら学習や情報収集の媒体として活用している反面、危険性や犯罪性と隣り合わせに立ち振る舞っている場面も少なくない。それだけに、これから学校教育における「情報」に関する学習のカリキュラム編成が重要な課題となってくる。機器の取り扱い方の習得は言うまでもないが、新しい学力観に立った情報教育の在り方が幅広く求められることになる。

参考文献

- 天野勝文・松岡新児・植田康夫 『現代マスコミ論のポイント』 学文社 2002
後藤忠彦 『コンピュータと教育情報システム』 東京書籍 1986
小林信彦 『テレビの黄金時代』 文藝春秋社 2002
佐藤隆博 『教育情報工学のすすめ』 日本電気文化センター 1987
島野功緒 『放送』 実務教育出版 2002
竹内郁郎・児島和人・橋元良明 『メディア・コミュニケーション論』 北樹出版 2002
春原昭彦・武市英雄 『日本のマス・メディア』 日本評論社 2001
坂東太郎 『マスコミの秘密』 アストラ社 2002
早川善治郎 『概説マス・コミュニケーション』 学文社 2002
早川善治郎・藤竹 晓・中野 収・北村日出夫・岡田直之 『マス・コミュニケーション入門』 有斐閣
1999